

4K olympAc 5th

話題の「HDR」から最新テレビ動向、制作事情まで

いまこそ考える
「4K」の目指す先

4K映像の普及・進展とともに歩みを進めてきた本誌・デジタルハリウッド大学の共催イベント「4K olympAc」。5回目となる今回も土曜日の開催（7月4日）で、話題のハイダイナミックレンジ(HDR)から広色域BT.2020に目を配りつつ、映像制作面での進展も踏まえたより具体的な内容が展開された。ここでは、その内容についてダイジェストで紹介する。

第一部 ●ヨーロッパの4K最前線、コンテンツ制作の動向を聞く

欧州の4K制作、5本から40本へ“急増”

口火を切ったのは、本イベントの呼びかけ人であるデジタルAV評論家・日本画質学会副会長の麻倉怜士氏による欧州最新4K動向の報告。フランス・カンヌで開催されたMIPTV「4Kコンファレンス」とIFA「グローバル・プレス・コンファレンス」を視察した麻倉氏による、文字通りの最新動向だ。

報告によれば、欧州の4K市場は、予想以上に活況だったようだ。「年末からドイツなどを中心に4Kテレビが売れ始め、その影響でソフト作りも活性化してきた」（麻倉氏）。結果、MIPTVがまとめる世界のドキュメンタリー作品のデータベースには、前年わずか5本だった4K作品が40本にまで増加したという。

自然、会場も盛り上がりを見せ、日本における4Kの話題もかなり取り上げられたそうだ。上映作品についても麻倉氏からいくつか紹介があった。「(ジャズミュージシャンの)ハービー・ハンコックのライブ映像は素晴らしい出来で、本人もかなり気に入っていたようだ」(麻倉氏)とのこと。著名人による評価は業界を超えた進展にもつながりやすいだけに、こうした作品が数多く登場することが今後の鍵を握ることにもなりそうだ。(麻倉著の詳細レポート記事：本誌7月号48頁～)。